様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１３４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2016
課題番号：２６５８００９３

研究課題名（和文）意味推測課題による非漢字系中上級日本語学習者の漢語動名詞の習得プロセスの分析

研究課題名（英文）Analysis of the acquisition process of Sino-Japanese verbal noun for pre-advanced Japanese learners from non-Kanji culture

研究代表者
桑原　陽子（KUWABARA, YOKO）

福井大学・国際センター・准教授

研究者番号：３０３９７２８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，非漢字系の中上級日本語学習者の漢字２字熟語の意味推測過程について分析した。特に，漢語動名詞（例：「洗車」のように「する」がつく漢字熟語）をとりあげ，それに「する」がついて動詞として使用できるかどうかの判断に，どのような知識が影響するかを調査した。ドイツ語を母語とする学習者を対象に調査した結果，漢字２字熟語の語構成についての捉え方，特に右側の漢字（例：「洗車」であれば「車」）の特徴に大きく影響される傾向があることがわかった。これは，母語であるドイツ語の語構成についての知識の影響が示唆される。

研究成果の概要（英文）：The current study investigates a process of inferring the meaning of Kanji compounds by intermediate and advanced Japanese learners from non-Kanji countries. Specifically, the study examines if the knowledge the learners have concerning Kanji and word structures could influence their judgement of whether or not the given compound can be used as a verb construction with “SURU”. The results of the research on the learners whose native language is German show that how learners interpret the stricter of Kanji compounds, especially the features of the second (or right-hand) Kanji of a given compound can have a strong influences on their judgements. This suggests that knowledge about word structure in their native language can affect the interpretation of Kanji compounds.

研究分野：日本語教育

キーワード：漢字２字熟語　漢語動名詞　意味推測　非漢字系日本語学習者　語構成

１．研究開始当初の背景

筆者は，本研究以前に，非漢字系上級日本語学習者を対象に，漢字２字熟語の意味推測過程の調査を行った。その結果，漢語動名詞の意味推測を困難にする要因として，以下の（１）から（３）の３つを得た。漢語動名詞とは,「勉強」のように「する」がついてサ変動詞になることができる漢字熟語である。

（１）語構成に関する思い込みがある

たとえば,「動詞は必ず左側に来る(例:開店)」という思い込みから,「家出」のように右側に動詞が来る漢字熟語の意味を推測できない事例や,「漢字熟語を構成する漢字のうち，意味的に重要な役割を担うのは右側の漢字である」と考え意味推測を誤った事例がある。しかし，なぜそのように考えるようになったのか明らかにできていない。

（２）ありえない語構成の存在を知らない

たとえば，漢字２字熟語を構成する漢字どうしが名詞修飾関係にある場合，被修飾語の名詞は必ず右側である（例：愛車)。しかし，このルールから逸脱した推測が観察された。「間食」について「間」を名詞と解釈し,「食べるために備え付けた間（ま)」という意味だと推測するような事例である。これは，右側の語（漢字）が左側の語（漢字）を修飾する構になる。

（３）サ変動詞の意味のとらえ方のゆれ

たとえば,「軽減」の意味を「少し減る」と推測した学習者が,「軽減する」の意味を推測できない事例がある。「軽減する」のように「する」がついた形で見せられると意味推測が困難になる原因としては,「軽減」がサ変動詞になるとは予想しておらず,「する」が動作主の意志を示す，あるいは「する」がつく動詞は他動詞であると考えて，最初の推測からの修正ができないことによる。その一方で，同じ学習者が「密集する」に対しては「『集まる』か『集める』のどちらか」と回答するなど，サ変動詞の意味のとらえ方が不安定な事例が見られた。

２．研究の目的

以上の研究の結果をふまえて，本研究は，漢語動名詞について以下の（４）（５）の２つを明らかにする。

（４）未習の漢字２字熟語に対して，それが漢語動名詞であるかどうかについて，非漢字系中上級日本語学習者はどのように判断しているのか。

（５）中級以降の非漢字系日本語学習者が持っている漢語動名詞の語構成についての知識は，どのように形成されるのか。

漢字２字熟語の意味を推測しようとするときに，その熟語が動詞性を持つのか持たないのかを判断することは，非常に重要な意味を持つ。漢字２字熟語の中で，漢語動名詞を調査の中心に据えることによって，漢字２字熟語の意味推測過程をより具体的に検討することができると考える。

３．研究の方法

上記の研究目的（４）（５）を明らかにするために，以下の２つの調査を行った。

調査１：国内外の非漢字系中上級日本語学習者22名を対象とした質問紙調査を行った。あらかじめ各語構成のタイプから漢語動名詞273語を選び，それに漢語動名詞ではない漢字２字熟語を加えた合計420語について,「する」がついて動詞として使用できると思うかどうかを判断してもらった。語構成の違いによって正答率にどのような違いがあるかを分析し，語構成のタイプが漢語動名詞かどうかの判断に与える影響を探る。また，調査協力者に対しては，調査終了後に可能な限り個別インタビューを行い，なぜ「する」がつく／つかないと考えたのかについて，詳しく聞いた。

調査２：非漢字系中上級日本語学習者約10名を対象とした質問紙調査およびインタビュー調査を行った。漢語動名詞を含む100語の漢字２字熟語について，調査１と同様に「する」がつくと思うかどうかを判断してもらった。調査は個別調査で，質問紙調査終了直後にインタビューを行い,「する」がつくかどうかの判断をどのように行ったのかについて，詳しく聞いた。１回の調査では調査材料の漢字２字熟語100語のうち50語について調査し，同じ学習者を対象に期間をおいて２回の調査を行った。

第１回調査：2016年３月（調査協力者10名）
第２回調査：2016年８月（調査協力者８名）

調査協力者の日本語学習歴と日本語力を把握するため，さらに調査協力者の母語を揃えるために，調査２はハンブルグ大学（ドイツ）で日本語を学習する中級以上の日本語学習者のみを対象とした。

なお，調査１，調査２のいずれも，漢字熟語を構成する個々の漢字は既習で，熟語としては未習である漢字２字熟語を使用した。

４．研究成果

調査結果：調査１

個々の漢語動名詞の語構成のタイプの判断は張（2014）にしたがい，そのタイプは次の５つに分類した。[AV型]（例：多発)，[VN型]（例：来日，外食)，[VV型]（例：試食)，[その他]，[データ外]である。[その他]には，接尾辞（例：特化)，接頭辞（例：殺到)，[NN型]（例：他界）が含まれる。[データ外]とは，張（2014）で扱われていないもので,「下見」のように音読みにならないものや,「空爆」のように省略によってできた漢字２字熟語などが含まれる。なお，Ａは形容詞，Ｖは動詞，Ｎは名詞を表す。

各漢語動名詞について,「する」がつくかどうかの正答率を算出した。98語に対して無回答であった１名を分析対象から除外し，420語の漢字熟語のうち，正答数300語以上の13名を成績上位群，300語未満の８名を成績下位群とした。語構成のタイプの中では[VN型]と[その

他]の正答率が成績下位群で低いことが示された（表１）。

表１　正答率80%以上と40%未満の漢語動名詞数の語構成による分類

語構成型	下位分類（総数）	正答率40%未満		正答率80%以上	
		下位	上位	下位	上位
[AV型]	A>V (17)	3	2	2	11
	V<<A (5)	1	0	0	3
[VN型]	N+V (13)	7	4	3	4
	V+N (36)	19	3	3	13
	N>V (16)	6	3	2	7
[VV型]	V>V (89)	15	1	22	67
	V・V (40)	10	3	12	23
[その他]	M>V (31)	14	2	1	12
	その他(18)	10	5	2	8
[データ外] (8)		4	2	0	1

＊網掛けは，40%未満，80%以上が半数以上であるもの

正答率が低い語を詳しく見たところ，「する」がつかないと誤って判断される要因として，「熟語を構成する漢字が動詞性を持たない」ことと「熟語を構成する漢字が接辞的用法を連想させる」ことの２つがあることがわかった（表２）。

「熟語を構成する漢字が動詞性を持たない漢語動名詞」とは，たとえば，[その他]の[NN型]に含まれる「他界」「前後」などである。これらは「他の世界」「前と後ろ」のようにいずれも名詞として解釈されていた。逆に，[VV型]の漢語動名詞の正答率が高く，その理由としては，たとえば「作動」について，「『作る』『動く』は両方動詞だから，熟語全体も動詞だ」と判断した事例のように，動詞性を持つ漢字が含まれているからというのがその代表であろう。また，漢語動名詞ではなくても動詞性を持つ漢字を含んでいる場合は，「『する』がつく」と判断されているものが多かった。たとえば，「始発」「集落」などがこれにあたる。これらの結果から，動詞性を持つ漢字が含まれているかどうかが，漢字熟語に「する」がつくかどうかの判断に大きな影響を与えていると言える。

「熟語を構成する漢字が接辞的用法を連想させる漢語動名詞」は，語構成のタイプを詳しく見ると[VN型]（例：赤面，減点）であることが多い。[VN型]の「N」にあたる漢字が「面」「点」「室」「力」のように，その漢字が右側の使われる別の漢字熟語の名詞を連想させる漢字の場合は，それに影響されて「『する』はつかない」と判断される傾向があることが示唆された。学習者のインタビューからは，「室」は「教室」「事務室」を，「力」は「能力」「体力」「知力」を連想させること，それらの漢字熟語がすべて名詞であるため「在室」「注力」も名詞としてその意味を解釈しようとしたこと，そのことが「する」がつかないと判断する決め手となったことが報告されている。

表２　上位群・下位群ともに正答率40%未満の漢語動名詞

漢語動名詞	語構成	上位群正答率	下位群正答率
大病	AV(A>Vi)	15.4	37.5
難航	AV(A>Vi)	30.8	25.0
意図	VN(N+Vt)	38.5	12.5
他言	VN(N+Vt)	38.5	37.5
的中	VN(N+Vti)	15.4	25.0
南下	VN(N+Vti)	23.1	25.0
赤面	VN(Vt+N)	30.8	37.5
注力	VN(Vt+N)	30.8	25.0
減点	VN(Vti+N)	30.8	12.5
目測	VN(N>Vt)	30.8	12.5
山積	VN(N>Vti)	15.4	37.5
報道	VV(Vt・Vt)	30.8	25.0
上下	VV(Vti・Vti)	38.5	25.0
敬遠	VV(Vt>Vti)	30.8	25.0
私語	その他(M>Vt)	23.1	12.5
一礼	その他(M>Vi)	38.5	25.0
早世	その他 (A>N)	15.4	0.0
他界	その他 (N>N)	0.0	25.0
物色	その他 (N>N)	7.7	25.0
機能	その他 (N・N)	30.8	25.0
前後	その他 (N・N)	7.7	25.0
熱中	データ外	30.8	37.5
白熱	データ外	15.4	25.0

では，どのような漢字が他の名詞を連想させるのだろうか。学習者のインタビューからは，学習者がすでに知っている語彙の中でその漢字がどのように使われているのか，すなわち，その漢字から連想しやすい漢字熟語がどのようなものかが非常に大きな影響を持つことが示されている。個々の学習者の既知語彙や，ある漢字からどのような語彙を連想しやすいかについては個人差があることが予想される。しかし，日本語教育学会（2005）によれば，漢字２字熟語の構造のパターンの中では，

「N>N」(例：牛乳),「V>N」(例：造花),「A>N」(例：美人）のような連体修飾関係のものが最も多い。そのため，学習者がふだん目にする漢字２字熟語の中では，連体修飾構造の名詞が多く，右に名詞性を持つ漢字が来ればその漢字熟語は名詞であるととらえられやすい可能性が考えられる。つまり，どのような漢字が右に来ても，それが名詞であれば漢語動名詞としては解釈されにくいと予想できるのではないだろうか。
また，張（2014）によれば，漢語動名詞のVN型のうちVとNが補足関係にある「V+N」と「N+V」では，「V+N」が91.9%，「N+V」が8.1％で圧倒的に「V+N」が多い。本研究の結果とあわせて考えても，右側にNが来る漢語動名詞については，非漢字系学習者に漢字学習指導をする上で注意が必要であることが示唆される。この点は今後の課題であり，１つ１つの漢字熟語をどのように意味推測をしたのかについて詳しくインタビューすることによって明らかにできると考える。
一方，漢字熟語の意味の透明性（transparency）の高低と，その熟語に「する」がつくかどうかの判断の正しさの間には，まったく相関がなかった。桑原（2013）では，語構成が明確である漢字熟語は意味の透明性が高いことが示されている。しかし，意味の透明性の指標は日本語母語話者によるもので，漢字熟語の意味を知った上での判断である。本研究のように漢字熟語の意味を知らない学習者の判断とは，まったく性質の異なるものであることが明らかになったと言えるだろう。

調査結果：調査２
調査の結果から，漢語動名詞の意味を推測する際に，学習者の母語の複合語の語構成についての知識が影響していることが示唆された。インタビューからは，「漢字２字熟語は，右側の漢字が重要な意味を担っている」「右側の漢字が名詞ならその漢字熟語は名詞で，右側の漢字が動詞ならその漢字熟語は動詞的な意味がある」というような報告が得られた。このような考え方を示す具体的な事例としては，たとえば，「渡米」に対して，「『渡米』が『アメリカに渡ること』という動詞的な意味を持つならば，右側の漢字が動詞であるべきで『米渡』になるはずだ」という学習者のコメントが挙げられる。また，そのように考える理由については，「ドイツ語の語構成を考えるとそのようになっているから，同じように考えている」という報告があった。
「右側の漢字が主要な意味を担う」という考え方は，複合語に関する「右側主要部の原則(right-hand head rule)」に合致する。ただし，漢字２字熟語の語構成について「右側の漢字が重要な意味を担う」ということを明示的に学んだことがあると報告した学習者はいなかった。
右側主要部の原則の点から，（１）（２）の事例を解釈しなおすと，次のようなことがわかる。（１）で「漢字熟語を構成する漢字のうち，意味的に重要な役割を担うのは右側の漢字である」と考え意味推測を誤った事例は，ドイツ語母語話者のものであった。いっぽう，（１）の，「動詞は必ず左側に来る（例：開店)」という思い込みから，「家出」のように右側に動詞が来る漢字熟語の意味を推測できなかった事例と，（２）の「間食」の推測の誤りの事例は，スペイン語母語話者のものであった。ドイツ語は，右側主要部の原則が合致する言語であるのに対して，スペイン語は右側主要部の原則があてはまらず，修飾部が被修飾部の後ろ（右側）に置かれる用法が存在する。スペイン語の語構成のルールから考えれば，（２）のように，「間食」について「『食』が『間』を修飾する」と解釈することは難しいことではないことが予想される。
つまり，漢字２字熟語の意味を推測する過程には，学習者の母語の複合語の語構成のルールが大きく影響している可能性が考えられる。このことを明らかにするためには，右側主要部の原則が当てはまる言語（例：ドイツ語）と当てはまらない言語（例：スペイン語）を母語とする学習者を対象に，同様の調査を行う必要がある。
また，調査１，調査２の結果をまとめると，学習者の母語の複合語の語構成についての知識と，個々の学習者が持っている日本語の漢字熟語の知識の双方が，漢字２字熟語の意味推測に影響することが示唆される。それがどのように影響しあうのか，さらに漢字２字熟語の語構成についての明示的な知識の提供がどのような効果を生むのかについて明らかにするには，今後さらに調査が必要である。

＜引用文献＞
①桑原陽子（2013)「漢字２字熟語の意味の透明性の調査」『福井大学留学生センター紀要』8，1-14.
②張志剛（2014)『現代日本語の二字漢語動詞の自他』くろしお出版
③日本語教育学会編（2005)『新版　日本語教育事典』大修館書店

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①　桑原陽子、漢字２字熟語が漢語動名詞かどうかの判断に及ぼす語構成の影響－非漢字系中上級日本語学習者対象の調査の結果から－、査読あり、国際教育交流研究、No.1、2016、27-36、
http://news2.ad.u-fukui.ac.jp/wp/wp-content/uploads/3_KUWABARA.pdf

②　桑原陽子、漢字２字熟語の意味の透明性の分析、国際交流センター紀要、査読あり、No.2、2015、1-9、

http://news2.ad.u-fukui.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2015kuwabara-1.pdf

③　桑原陽子、非漢字系上級日本語学習者による漢語動名調の意味推測の困難点-「する」の有無が推測に及ぼす影響ー、国際交流センター紀要、査読あり、創刊号、2014、1-12、http://news2.ad.u-fukui.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2014kuwabara-1.pdf

〔学会発表〕（計１件）
①　桑原陽子、漢字２字熟語が漢語動名詞かどうかの判断に及ぼす語構成の影響ー非漢字系中上級学習者対象の調査の結果からー、第二言語習得研究会（JASLA）、2015 年 12 月 20 日、東北大学（宮城県仙台市）

６．研究組織
(1)研究代表者
桑原　陽子（KUWABARA, Yoko）
　福井大学・国際センター・准教授
　研究者番号：30397286

(2)研究分担者

(3)連携研研究者

(4)研究協力者
村田　裕美子（MURATA, Yuimiko）
ミュンヘン大学・講師